「「愛の錠前」に占拠されたパリの橋：脱美術館と観衆との「あいだ」を考える」
『あいだ』196号（連載第89回）2012年9月20日　17-19頁

あいだのすみっこ不定期漫遊連載　第89回

「愛の錠前」に占拠されたパリの橋
脱美術館と観衆との「あいだ」を考える

稲賀 繁美（いなが　しげみ／国際日本文化研究センター，総合研究大学院大学）

無数の南京錠が橋の欄干に寄生する

久しぶりに所用のためパリを訪ね，新装なった19世紀美術館，オルセーに行ってみた。だが入り口には長蛇の列。あっけなくあきらめて，袂の歩道橋・ソルフェリーノまで歩いていった。この橋の欄干ごしにオルセー駅のほうを見やるのが，最適な写真撮影の角度だからだ。だが周囲の歩行者たちを見ると，どうも行動パターンがおかしい。かなたの川沿いの美術館の建物ではなくて，しきりと欄干に注目したり，欄干に写真機のファインダーを接写させたりしているからだ。

欄干がどうかしたのかしら。そう怪訝に思って注意してみると，鉄の網の安全棚のうえに，なにやら金属の塊が，無闇にぶら下がっている。よくみると，これがことごとく雑多な錠前。いつのまにか歩道橋の欄干は，人々が寄贈した錠前の群れに占領されたに等しい状態になっていた。そしてひとつひとつ異なる錠前が，朝日を受けて，色とりどりに乱反射して，美しく輝いている。無名の人びとの個人的な努力が，いつしらず集団的な藝術作品をつくり上げてしまった格好だ。

これらの錠をよく見ると，寄進者たちは，さまざまな願かけをしている。「ロミオとジュリエット，永遠に，2009年7月」だとか，「愛よ永遠に。誕生日に，パリ，2010年2月」だとか書き込まれている。これではまるで日本ならば神社の絵馬だ。「愛の南京錠」cadena d'amourという表現がフランス語にはあるのだそうで，これの時ならぬ集団的な復活である，というふうに2012年6月7日付けの新聞『ル・フィガロ』には，写真入り記事が掲載されていた。

事情通によると，こうした南京錠の委託は，このソルフェ橋だけでなく，ルーヴルと学士院を結ぶ歩道橋のポン・デ・ザール，レオポール・セダール・サンゴール歩道，枢機卿橋ほかにも広がっているのだという。はやくも昨2011年には，南京錠の無軌道な増殖に危機感を抱いた市当局は，「文化遺産に対する毀損の恐れを憂慮」して，これらの「愛の錠前」を一斉に撤去せざるをえない，と通告した。

南京錠大量――挙消滅の怪

ところがその直後，ひとつの神秘あるいは奇跡が発生する。一夜のうちに2000個以上もの数の南京錠が一斉に「蒸発」してしまったのだ――だれひとりそれに気づくこともないまま。市当局の説明では，当局は強制撤去など実施していないし，ましてや2000個にのぼる錠前は，ひとつひとつ巨大なスパナで切断せねばならず，作業効率からいっても，一夜にして，誰も気づかぬうちに撤去することなど，技術的にも不可能だという。鉄柵のほうをすべて一夜で入れ替える，などという藝当も問題外。管理当事者自身が，日本語の表現でいうならば，「狐につままれた」格好とあいなった。

ソルフェリーノ橋の欄干に施錠された南京錠の群れ

人びとは南京錠にどんな祈りを託すのか

オルセー美術館を背景に，ソルフェリーノ橋
Pont Solferiono（2012年6月5日，撮影：稲賀繁美）

コペンハーゲン市内の運河を跨ぐ橋でも同様の光景
Knippersbro（2012年8月25日，撮影：稲賀繁美）

モスクワのリシュコフ橋

警察にも市当局にも執行不可能で，ましてや手品師や覆面集団でも，目撃者なく達成することなどできようはずがない，この失踪事件。その真相は不明のまま，調書は閉じられた，という。

ところが，この不可思議な失踪事件のあとで，またしても南京錠の増殖が再開された。「わが麗しき街に自然発生したこの現象を，生きるがままに放置する」との粋な計らいが，行政側からは修正意見として示された。とはいえ，そこにいたるまでには，「最高位の代議者たちが対策を協議した」との噂が，現パリ市長，ベルトラン・デラノエの周辺筋から伝わっており，藝術橋の管理責任をもつ第６区の区長，ジャン=ピエール・ルコックは，この「冗談ごと」にご機嫌斜めだったといわれている。

同様の事態にみまわれたモスクワの橋では，欄干の金属網が加重で破損することを恐れて，代用品として「金属の樹木」が提案された。だが，パリでは，そうした措置は結局は放棄され，橋の欄干は，いまでは南京錠の苗床としての市民権を獲得し，その順調な生育と繁栄を促している。いまや制度は公認のものとなり，橋のたもとのキオスクでは，記念の南京錠が売りに出され，地方からポット出の観光客や，外国からの来訪者のみならず，ほかならぬパリ人種も，みずからの愛の記念を，公共建築のうえに合法的に施錠する儀式に熱中する有様となっている。

施錠行為の国際的連帯？

日本なら，同様の事態に対して，行政はいかに対処しただろうか。かつてパリ市長だったジャック・シラクは，姉妹都市である京都の三条大橋と四条大橋とのあいだに，歩道橋を掛ける提案をおこなった。だが，自尊心の高い京都市民は，議論のすえ，ポン・デ・ザールの亜流が京都に据えられるのは恥辱だとして，このせっかくの提案を却下している。もしこれが実現していたなら，今頃はそこにも無数の錠前が投資され，あらたな京都の観光名所となっていただろうか。それとも日本の行政は，そうした想定外の椿事を，公共の安寧への侵害として，目の敵にして撤去しただろうか。

８月に別の用事で北欧はデンマークの首都，コペンハーゲンを訪れた。ハンス・クリスチャン・アンデルセン通りから，市街を二つに分かつ運河にかかる橋をわたっていると，どこかで見た現象がここにも繁殖していた。おなじような錠前が，旋錠可能な生息地を目ざとくみつけては，得意げに住み着き，きらきらと光沢を放っている。無名の市民の自己主張が，集団的藝術行為へと結びつく。ひとつひとつのカップルのかけがえのない愛の営みが，鍵＝約束という寓意を頼りに，みずからの姿を永遠にとどめようとする――実際の愛はその日限りのはかないものだったとしても。

あたかも雑草が隙間＝ニッチを見つけて繁殖するように，公共空間の何気ない空隙が，無数にして無名の藝術意志によって占領される。とはいえ，愛を語る媒体が金属の錠前だった，というのが，いかにも「鍵社会」たる欧州臭さをも感じさせる。思わぬ場所に出現した金属の雑草園。そのつつましやかな無機物の花園に，脱美術館時代の人々の意識の集合体，心の拠り所を見た。はたしてこの南京錠のネットワークは，全地球の人々を結びつける靭帯《LOVE LOOKS BEYOND THE WORLD》となるのだろうか。それとも，それはあくまで個人主義的で核家族的な愛の，集合的象徴に過ぎないのだろうか。社会的靭帯を失いつつある21世紀社会の提喩が，橋の欄干という人的移動の媒体のうえに，みずからの生存の痕跡を残そうとする。そのときならぬ参集と，結果として生ずる星団のような密集に，言い知れぬ感動を覚えたことだけを，ここで控えめに報告しておきたい。藝術社会学者を気取ってその意味付けについてあれこれ思弁を弄するのは，また別の機会，ということにしておこう。

路上観察学会会員の諸氏であれば，はたしてどんな感想なり意見を開陳されることだろうか？